とてもあるまいが打ち壊して此店の御厄介になるといふ始末。
（未完）

濱田の海

—テツタロー—

コトンといつたと思ふとギイギイ艪の音が聞え初めた。いつの間に來たものか僕の立つて居る粟島の岩壁の直下にはかすかな灯を點けた漁船が一隻沖に向つて進んでゐる。灯にすかして見ると船の中には漁夫が二人居るらしい。月はニュートラルチントの雲に包まれて淡暗い光を下界に投げてゐる。いたづらに凄い夜だ。

『沖や荒てるのう』

『荒れるなあいいがあす朝こゝを歸る時やどげえな元氣だらうかのう』

漁夫等の聲もだんだんかすかに船は艪の音と共に沖へ沖へと進んで行く。それにつれて灯はインチゴを流したやうな海面に長く長くゴールドの尾を引く。はるか向ふに眠つて居る矢名島の岩角に打寄せる波の音がドッドーと響いた時可憐な灯は。ポッツリ消えた。

後は寄せてはかへす波の音かすかに。

黑き土

奥村博

黑き土み墓の土ふるとき悲しみ又もあらたまり來ぬ
淋しさをひた吸ひ度さに泣き度さに
こよひもひとり師の墓に行く
あはれなる博てふ子はこよひまたみ墓のもとに
忍び泣きする
餘りにもめゝしと見ゆれしかはあれどその悲しさに又も涙す
悲しめど哀しめとなほつきぬかな我が師の君の死を痛むこと

三人の寫生行（一）

大阪　長谷川利行

寫生旅行などと洒落居るが其實鉛筆スケッチ位で濟し込んだり。風彩は僕が一番弱年で下等、同志者のK君大阪府廳のS君は人望とテレカクシで頗る上等、行く宿々での待遇は周到であつた。S君は油繪具を抱へ十二號カンバスを張込んで居たのに比較してK君は新調の大下先生撰擇の水彩道具イーゼルは輕快な奴で道行に僕の重たいのに泣かされる。どう見てもK君の長髪の重味で畫家らしい。前夜は日本橋の吉野館で合宿し八月三十一日の未明。箕面電車の人となつた、空にはコバルトの量多く快晴疑ひなしであつた。

池田町で下車して壁の汚い河岸の家の畫題をさぐる。花月亭瓢屋、の遊び屋の裏には靜止したる水の面、面白ければとてK君は八ッ切を描く、藝者二階の窓より「オホ、、」と冷笑を浴せかける。K君たまらず嘲弄する。S君この二三時間の間に池田川にしたりて「女と赤き印象」といふ命題に洗濯女を板に描く、